



柔道のちよつとイイ話

学級日誌に、男子の体育で「26Rに完敗」という記事があった。柔道のことらしい。来月の13日の午後には柔剣道大会が予定されているのだが、我が25Rの男子諸君は大丈夫なのだろうか。で、関係ないが、その柔道に関する有名なオリンピックのエピソードを紹介してみよう。

そもそも柔道は、1964年の東京オリンピックから正式種目となった。会場も武道館だし、当時日本では全階級で金メダルが目指されていた。しかし、その日本の夢を打ち砕いた男がいた。オランダのヘーシンクという選手である。ヘーシンクは、無差別級の決勝で、日本のエース神永昭夫と対戦し、袈裟固めで一本勝ちをおさめたのである。

その時のヘーシンクの素晴らしい態度と、その背景にあった物語が今回紹介するエピソードである。ちょっと古くなるが、2006年5月17日の朝日新聞夕刊の記事を引用してみよう。

*

初めて(ヘーシンクが)来日したのは56年。奈良・天理大の監督、松本安市に出会った。22歳と38歳。この師弟が日本の柔道史を変えた。

松本はその年、就任わずか3年で天理大を日本一に導き、名伯楽ぶりが知れ渡った。松本はヘーシンクの器用さと素直な性格にほれた。粗削りだったヘーシンクの技が松本の指導で見違えるほど切れを増す。

松本は妻の澄子(81)に話していた。「どこの国の人であろうと、柔道が好きな人には正しい、きれいな柔道を教えたい」

ヘーシンクは61年の世界選手権を制し、日

本にとって「脅威」となる。そして64年の東京五輪で師弟は敵と味方に分かれた。

柔道が五輪で初めて正式種目になり、しかも日本武道館での開催。日本は本家として負けが許されなかった。監督を打診された松本は気乗りがしなかった。事実上の世界一を決める無差別級で、ヘーシンクに勝てる日本選手はいないとあきらめていた。

決勝。ヘーシンクは日本のエース神永昭夫と組み合った。試合場の下から松本が神永に声を飛ばした。9分22秒。神永の体落としを後ろから抱きかかえて引き倒し、けき固めで「一本」。

その瞬間、日本の柔道は世界の JUDO に変わった。

オランダの役員が歓喜のあまり畳の上に土足で駆け上がってきたのを見て、ヘーシンクはサッと右手で制した。立ち上がって追い払う。笑顔もガッツポーズもない。

「神永さんは敵ではなく仲間なのです。その前で喜ぶのは失礼でした」と驕らなかつた。

*

最後の二つの段落、イイ話でしょ? 喜びをともにしようとする役員であっても、土足では畳にはあがらないように制すること、そして、静かに勝利を受け入れ、同時に、競った相手に対しても礼を忘れないこと。そんな行動が咄嗟にとれたのは、柔道を深く愛し、その愛した柔道に心から精進したからだろう。そして、そのような礼儀と愛情を身につけさせたのが、「仲間」である日本人であったのである。柔道は「道」である。そのことがよく分かるエピソードでもある。